

2022年9月18日 主日礼拝 敬老感謝の時

説教題「希望の源なる神」ローマ 15 章 13 節、イザヤ 46 章 1～4 節

主任牧師 加藤 誠

「希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるように。」(ローマの信徒への手紙 15 章 13 節)

聖書の神さまは「希望の源なる神」です。「源」というのは、湧き水が湧き出すように決して途切れることなく、枯れることなく、私たちに希望を与え続けてくださる神さまということです。どのような時にも、どのような状況でも、神さまのもとには「希望」がある。とてもうれしい言葉です。

例えば、私たちにとって「過去」は修正できないものです。「しでかしてしまった失敗」を、時計の針を戻して修正したり、なかったことにはできません。提出してしまったテストの解答用紙に書いた答えを、A ではなく B と修正することはできないし、誰かに向かってぶつけてしまった言葉を「あの言葉はなかったことにしてくれ！」ということにはできません。ですから、私たちは失敗しては後悔することを繰り返すのですが、けれども主なる神さまは、私たちが「しでかしてしまった過去の失敗」をただ断罪するのではなく、「それは間違っていた」と諷めながらも「大丈夫、これからがある！」「あなたの失敗は失敗で終わらない。わたしがあなたと共に歩むから！」と励ましてくださる方です。

主イエスの弟子たちがそうでした。あの十字架で、彼らは取り返しのつかない大失態をやらかします。弟子たちはみんな逃げてしまい、ペトロは主イエスの後についていきましたが、「イエスなど知らない」と否定してしまいます。弟子として大失態であり失格です。やり直せるならやり直したい。取り消せるならあの言葉を取り消したい。そう強く願ったとしても、決定的失敗を無かったことにはできないのです。けれども、復活の主イエスがご自分から弟子たちに近づかれて、「聖霊を受けなさい！」と弟子たちに愛と祈りを注ぎ息を吹きかけてくださいました。「これからもわたしはあなたと共に歩む。神さまの派遣をいただいて、一緒にこの世界で神さまの働きを担っていこう！と弟子たちを励まされたのでした。弟子たちの「取り返しのつかない失敗」は、「キリストの恵みと赦し、神の真実の愛を証しする告白」として力強く用いられていられていったのです。

今、大井教会の聖書日課は出エジプト記のモーセ物語に入ったところです。エジプトで奴隷となっていたイスラエルの民を救い出す偉大な仕事を担ったモーセ。けれども神さまから召命を受けた時、モーセは本当に小さくされて生きる自信を失っていました。モーセの生まれはイスラエル人でしたが、エジプト王の王女に拾われて王宮で育てられ、当時の最高級の教育を受けます。けれども生まれが定かではないモーセに対する風当たりは相当に強いものがあつたことでしょう。「あいつはど

この馬の骨か分からない」「もしかすると奴隷のイスラエル人の子ではないのか」「この王宮に居るべき人間ではない」。背後では陰湿な陰口が叩かれていたと想像されます。「自分はいったい何者なのか。エジプト人として生きていって良いのか」。悩みと葛藤を抱えていたモーセは、イスラエル人を虐待していたエジプト人を殺めてしまいます。それはイスラエル人のために良かれと思ってのことでしたが、イスラエル人の反応は冷たいものでした。彼らにとってモーセはエジプトの王宮の人間でしかなかったからです。モーセは荒れ野に逃げます。そしてミディアンの羊飼いの家族に受け入れられて妻をめとり、生まれた男の子に付けたのが「ゲルショム」という名でした。それは「異国の地で、さ迷い歩く根無し草の自分」という意味です。エジプト人でもイスラエル人でもない。ミディアン人にもなり切れない男。何のために、どこで、自分は生きたらよいのか。モーセは約 40 年間も (!)、うつろな思いを抱えながら荒れ野をさまよっていたのでした。

神さまが「モーセよ、あなたにしてほしい仕事がある！」と言った時、モーセは「わたしはいったい何者でしょう？」と応えています。モーセは「失敗にまみれた過去」を抱えて、生きるべき道をすっかり見失っていたからです。けれども主なる神は、打ちのめされ、模索し、小さくされているモーセをこそ、ご自身の大切な仕事に召し出されたのでした。この時、モーセは 80 歳。そしてモーセの良き相棒として立てられたアロンが 83 歳。今の日本なら「後期高齢者」と呼ばれる年齢の二人が、大切な神の働きを担うことになります。モーセの「失敗にまみれた過去」は、希望の源なる神さまによって「神さまの大切な仕事を担う力」に変えられます。

イザヤ書 46 章 4 節の「わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」という御言葉、そのままです。この 4 節の前の 1 節に「ベルはかがみ込み、ネボは倒れ伏す」という言葉が出てきますが、ベルもネボもバビロニア帝国で祀られていた神々です。いずれも数十メートルの高さの偶像が建てられて、人びとが拜んでいました。けれども、その偶像が倒され、瓦礫となって家畜に背負われて運び出される時が来るというのです。富と権力を約束してくれる人間がつくりだした偶像は、必ず倒れる時がきて最後は瓦礫となる（歴史的にそれは事実となりました）。人間に運び出される神ではなく、私たち人間を最初から最後まで、担い、背負い、救い出す、真の神がここに生きておられるというイザヤの呼びかけです。私たちは失敗するし、挫折するし、後悔にまみれます。けれども、私たち一人ひとりを受え命を与えてくださった神さまによって、私たちには「これから」がいつも用意されています。どんなにもう遅いと思っても、もう取り返しがつかないと思っても、神さまは私たちを、神さまと共に歩む「これから」に招いておられます。

モーセの「これから」は 80 歳にして始まりました。神さまが用意しておられる「これから」に信頼して、神さまの招きを受けてと一緒に歩んでいきたいのです。